
古代アメリカ学会会報

第32号



日の出直前のティカル遺跡 ©多々良 穰

目次

◆第1回研究懇談会の報告	1	◆東日本大震災の被災会員に対する措置	6
◆会員からの投稿	2	◆事務局からのお知らせ	6
◆書籍紹介	3	◆編集後記	8

2012年8月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

第1回研究懇談会の報告

■第1回東日本部会研究懇談会

『古代アメリカGIS考古学—ルートと地域間関係』

平成24年5月19日に、東京大学総合研究博物館ミュージアムホールにて第1回東日本部会研究懇談会が開催された。この新たな研究事業を形にするにあたり、西日本部会幹事の芝田幸一郎会員と協議し、今回の東西共通の基本方針として、特定のテーマに関連する発表を複数集めること、中米地域・南米地域それぞれの研究者を招くことを決めた。そして名簿に掲載された各会員の関心分野、および各自の昨今の活動・著作を参考に、設定可能な研究テーマをいくつか抽出し、候補者に打診した。その結果、東日本部会の企画として実現したのが、GISルート分析と接点をもつ2組の研究発表であった。あくまでも会の企画であることを第一義としたので、会外にはあまり積極的に告知しなかったが、会員27名に加え非会員3名の参加をみた。

会は14時に開始し、加藤泰建会長の挨拶ののち、まず嘉幡茂会員（愛知県立大学大学院国際文化研究科客員共同研究員）による「テオティワカンの黒曜石獲得戦略における功罪：GISとXRFを基にした考察」が、次に山本睦会員（埼玉大学非常勤講師）・伊藤裕子会員（埼玉大学修士修了）による「ペルー北部～エクアドル南部における形成期の移動ルートと地域間交流：GISによる加重コストルート分析を用いて」が発表された。双方の内容に関しては、事前に参加者が予習できるよう学会HPに事前に抄録を掲載したので、それをご参照いただきたい。

GISに関して業績と教壇経験のある松本剛会員（南イリノイ大学人類学科博士課程）に、両者の発表をネット中継によりリアルタイムで視聴していただいた。そしてコメンテーターとしてGISルート分析に関する昨今の研究状況と、方法上の課題点についてお話しいただき、さらに発表者との間で意見交換が行われた。社会の発展・崩壊という大きな議論を組み立てるために、分析ツールのひとつとしてGISを援用した嘉幡発表と、ラクダ科動物キャラバンのふるまいを想定し、移動コストの変数じたいに新たな試行を盛り込んだ山本・伊藤発表という、両者の対比が明確になった。地域間関係や交易の問題

に関心を寄せる研究者にとって、双方の研究内容とそのスタンスの対比は、大いに参考になったと思われる。



（写真提供：鶴見英成）

質疑応答を含めて各自60分ずつ、さらに休憩を挟んでコメント・質疑応答を45分程度というプログラムであったが、存分に発表・意見交換を行うためには、もっと時間に余裕を持たせた方がよかったようである。発表者の人数やテーマの設定などとともに、次回開催に向けての課題としたい。

（東日本部会幹事：鶴見英成）

■第1回西日本部会研究懇談会

『中南米のパブリック考古学—人々と遺跡の狭間で』

平成24年6月16日に、神戸市外国語大学の三木記念会館にて開催された。あいにくの雨天ではあったが、会員13名、一般4名、計17名が参加した。学会の規模からして悪くない数字だが、関西在住の会員には次回以降より積極的に出席して頂ければと思う。一方で、関東から阿部・井上・荘司ら若手会員3名が夜行バス等で駆けつけ、積極的に発言して日帰りしていった姿は、筆者を含む中年会員を大いに刺激した。一般参加者4名の内訳は、学会ウェブサイトを見て来た者1名、発表者の友人等2名、神戸外大学部生1名であった。天候の影響も無視できないが、ウェブサイト以外の広報手段について一考の余地があるだろう。

当日のプログラムは以下の通り。

(写真提供：佐藤吉文)

【発表1】ダニエル・サウセド・セガミ（総合研究
大学院大学・博士後期課程）「ペルー北海岸に
おけるパブリック考古学の活動」13:30～14:15
（および質疑応答 10分）

【発表2】大谷博則（奈良大学院博士満期退学）「イ
ンカ道コンソーシアム：ペルー国コンチュコス
地域の事例から（※タイトル変更）」14:25～
15:10（および質疑応答 10分）

【小休止】10分

【発表3】村野正景（京都府京都文化博物館）「パブ
リック考古学の実践と課題 - エルサルバドル
共和国における経験をもとに -」15:30～16:15
（および質疑応答 10分）

【総合ディスカッション】16:25～17:30（17:00 終
了予定だったが 30分延長）

各発表者の個別事例に対しても、様々な角度から
質問・コメントが飛び交ったが、総合ディスカッシ
ョンは松本・宮野らベテラン会員の発言を契機とし
て一層充実したものになった。サウセドと大谷の発
表を踏まえた村野の発表を主な素材として、以下の
2点に焦点があてられた。1つはパブリック考古学
と開発人類学など関連分野との関係であり、もう1
つは中南米という地域でくくことの意義である。
当初は30分程度で終了する予定であったが、質疑
応答が止まず、1時間に延長された。結果として、
ほぼ全参加者の発言が引き出されることになった。

（西日本部会幹事：芝田幸一郎）



会員からの投稿

●「インカ帝国展」見学会

多々良 穰（東北学院榴ヶ岡高等学校）

私の勤務校では、歴史教育を効果的に進めるため、
2006年度から博物館を積極的に利用している。毎年
希望者を募って「博物館見学会」を実施している。
当初は勤務校の生徒のみを対象にしていたが、社会
教育も視野に入れ、保護者や一般の方々にも勤務校
の公式HPや個人的なFacebookなどを通じて呼び
掛けている。

これまでの博物館見学会は、以下の通りである。

○2006年度 第1回

「大アンコールワット展」（仙台市博物館）

○2007年度 第2回

「吉村作治の早大エジプト発掘40年展」
（仙台市博物館）

○2008年度 第3回

「ナスカ地上絵の謎展」（自然史博物館）

○2009年度 第4回

「古代カルタゴとローマ展」（仙台市博物館）

○2009年度 第5回（同年度2回目）

「トリノ・エジプト展」（宮城県美術館）

○2010年度 第6回

「インカ帝国のルーツ 黄金の都シカン展」

（仙台市博物館）

○2011年度 第7回

「世界遺産古代ローマ文明の奇跡 ポンペイ展」

（仙台市博物館）

※大震災のため実施できず

そして、今年度は第8回目として「インカ帝国展」
（仙台市博物館）が行われた。開場前から、約150
人の列ができるほどの盛況ぶりであった。



7月21日(土)9:00の開館した直後、仙台市博物館の小ホールで事前解説が行われた。これは今回に限らず、毎回行っている恒例行事である。学芸員による館内利用の説明があった後、僭越ながら私が40分ほど解説した。パワーポイントを利用し、映像を交えてインカ帝国の概要と展覧会の見どころを話し、その後自由見学とした。参加者は小学生5名、中学生1名、高校生41名、大学生3名、そして一般30名の計80名であったが、特に高校生と社会人の関心が高く、長い人は見学時間が2時間半にも及んだ。私を解説員として同行させて質問攻めにするなど、熱心に見学していた方もいた。高校生には、意外にも博物館に来館するのが初めての者もいた。

ご覧いただいた方も多と思うが、この展覧会は4部構成になっている。第1部「帝国の始まりとその本質」では、チュニック（男性用貫頭衣）やケロ（儀礼用コップ）、ネコ科動物の図像に興味を持つ方が多かった。3体の出土人骨では、頭蓋変形や外科手術について質問が多かった。第2部「帝国の統治」では、授業で話していたキープの本物が見られるとあり、高校生は話題にしていた。また、やはり4体のミイラとファルドの前では足が止まり、4分ほどの解説に真剣に耳を傾けていた。チムー王国との戦争のコーナーでは、棍棒やボラ、埋葬所の模型に見入っていた。第3部「滅びるインカ、よみがえるイ

ンカ」は、正直あまり関心が高くなかったようである。第4部「マチュピチュへの旅」では、今回の展覧会の目玉「3Dスカイビューシアター」を楽しんでいた。



参加者には、アンケートにも協力していただいた。詳しい報告は後日改めて行いたい、「事前解説でもっと聞きたかったことは？」という質問に対するコメントだけ載せておきたい。

- ・マチュピチュが高いところにつくられた意味
- ・インカ以外の先住民について
- ・王族の系図の説明
- ・天体観測と宇宙観
- ・ナスカやシカンなどのインカ以前の話
- ・インカの末路（キリスト教受容もからめて）
- ・クイ（テンジクネズミ）以外の食物
- ・マチュピチュに行った時の感想
- ・ミイラの埋葬数
- ・インカの儀式
- ・当時の生活様式

これだけ、関心が高いことに驚くとともに、古代アメリカに関する、より開かれた環境を作っていくことが重要だと認識させられた。

今後も、博物館を積極的に使用した世界史教育を継続し、社会教育的な立場からも、広く博物館への来館を呼び掛けたい。

書籍紹介

●自著紹介

『マヤ文明 密林に栄えた石器文化』(岩波新書)
『“謎の文明”マヤの実像にせまる』(NHK出版)
青山和夫(茨城大学人文学部教授)

出版までの経緯・背景

1986年以來の私のマヤ文明の調査成果や最近のマヤ研究の到達点をまとめた拙著『マヤ文明 密林に栄えた石器文化』(岩波新書) [図1]とNHKラジオ講座(2012年7月3日から9月25日まで計13

回放送)のテキスト『“謎の文明”マヤの実像にせまる』(NHK出版) [図2]が、それぞれ2012年4月と6月に刊行された。私が領域代表を務める文科省科研費新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」<http://dendro.naruto-u.ac.jp/ppecc/>の研究成果や古代アメリカ学会の活動についても触れている。両書が、一人でも多くの方にマヤ文明に興味をもつていただき、マヤ文明の実像が広まるきっかけになれば、私の大きな喜びである。



図1

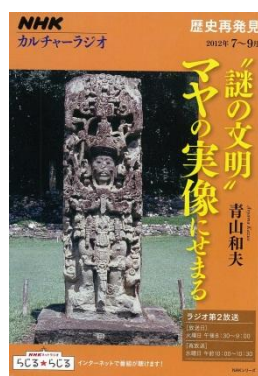


図2

ここでは、『マヤ文明』について詳しく紹介したい。本書は、マヤ文明を築いた人々の生き活きとした生活や世界観を描き出して、マヤ文明の実像を紹介する最新の入門書である。2012年11月に50歳になる前に、マヤ文明に関する岩波新書を出版するという、私の長年の目標の一つが果たされた。岩波書店が誇る敏腕編集者の大山美佐子さんから、本書の企画が正式に通ったという連絡を受けたのは、グアテマラのセイバル遺跡の調査に出発する直前の2011年1月末であった。刊行予定は、「マヤ・イヤー」の2012年1月であった。しかし帰国して3日後に東日本大震災に被災し、家族を連れて関西に一時的に避難したために、執筆の開始が遅れてしまった。

本書の初稿は、2011年7月から8月までのグアテマラの調査から帰国後と9月末に文部科学省で実施された「環太平洋の環境文明史」の中間評価の間の、2011年9月の3週間に集中して書いた。それから原稿の推敲に十分な時間をかけて、内容の精査と修正加筆を入念に行った。国立民族学博物館の八杉佳穂先生とアリゾナ大学の猪俣健さんに原稿に目を通していただき、大山さんと協議しながら内容を練り上げていった。さらに大学生の長女さくらと高校生の二女美智子に原稿を熟読してもらい、一般市民の方

や大学生だけでなく、「高校生にもわかる読み物」になるように最大限の努力をした。最終稿が完成したのは、セイバル遺跡で調査中の2012年2月であった。本書は、筆者の研究生活をいつも暖かく支えてくれる、妻ビルマと二人の娘に捧げるものである。

『マヤ文明』: 内容の要点

本書は、マヤ文明とは何か、マヤ遺跡を掘る、諸王・女王・貴族たち、農民の暮らし、宮廷の日常生活を復元する、マヤ文明の盛衰は語る、の6章構成となっている。

工夫した点としては、初心者の読者を想定して、人名や地名など、日本人にはあまり馴染みのないカタカナの固有名詞や専門用語をできるだけ使わないようにした。紙面の都合もあり、拙著『古代マヤ 石器の都市文明』(京都大学学術出版会、2005年)のようにマヤ文明の全容を通史として網羅的に概説することはあえて試みなかった。対照的に、本書では古典期(後250~1000年)のマヤ低地の主要遺跡を中心に執筆した。読者の理解の一助として、巻頭カラー写真4枚を含め、100枚ほどの豊富な図版を掲載した。大山さんの提案により、マヤ地域の主要遺跡の地図だけでなく、第1章のセイバル遺跡の調査を描写するにあたってはグアテマラの略地図を、第2章のラ・エントラダ地域とコパン遺跡の調査を記述する上ではホンジュラスの略地図を挿入した。中米にまだ行かれたことのない方は、これらの地図を参照しながら、本書を読んでいただければ理解が深まると思う。

写真図版は、本学会員の猪俣健さんと多々良穰さん、写真家のJ. Kerrさんと竹田武さんが撮影した計4枚を除いて、全て筆者自身が撮影したものである。各章の扉の写真や図は、大山さんと相談しながら、章を代表する視覚的にインパクトの強いものを厳選した。たとえば、第2章の扉の写真「コパン遺跡の石碑と、妻ビルマ・長女さくら」は、当時ピッツバーグ大学大学院生であった私が、ホンジュラスにおける10年目の調査中に撮影したものである。ビルマのおなかの中には、新たに二女美智子の命が宿っていた。この写真は、筆者の研究室の机の上に置いてあり、苦しい時にいつも勇気と力を与えてくれる。アメリカ留学とコパン遺跡の調査は、学者になるか、妻と二人の子供を抱えて路頭に迷うか、という背水の陣だった。私は、結果的に、4年で修士号

と博士号の両方を取得して、ピッツバーグ大学人類学部の最短記録（それまでの記録は5年）を塗り替えたのである。

第1章では、セイバル遺跡の調査の結果、マヤ文明は、従来の学説よりも300年ほど早く、先古典期中期の前半の前1000年頃に興ったことを述べる。つまりトウモロコシ農耕を基盤とする定住生活の開始に伴って、マヤの王権が形成された。また、初心者の読者のために、グアテマラという国や人々についても軽く触れている。次にマヤ文明の特徴について概説してから、いわゆる「マヤ文明の終末予言」は、現代人のねつ造であり、むしろ現代の社会不安を如実に表していることを明記する。マヤ文明のいかなる碑文にも、2012年の「世界の終末」は記されていない。マヤ支配層は、前3114年を長期暦の唯一の暦元としていたのではない。彼らは、長期暦よりもはるかに周期の長い循環暦をいくつも用いたのであり、このことから現在の長期暦が一巡しても世界が終わらないことが明白である。

第2章では、私の「マヤ文明の出会い」と調査研究、妻ビルマと長女さくらが生まれた、ホンジュラスという国や人々についても紹介する。私の「伝家の宝刀」になっている石器の使用痕研究をはじめ、英語とスペイン語のバイリンガル版で1999年にアメリカで出版した博士論文の研究成果を簡潔にまとめている。コパン王朝は、ラ・エントラダ地域など、周囲の中小都市を統括して広域国家を形成し、少なくとも良質な黒曜石のような一部の実用品の地域内・地域間交換を集権的に統御していた。コパンは、実用品と美術品からなる手工製品の生産と消費の中心地であった。つまりコパンの都市機能に注目するならば、国家的な宗教儀礼や政治活動の他に経済活動もかなり集中していたことがわかった。

第3章では、ティカル、パレンケ、チチェン・イツァなど、マヤ文明を代表する他の王朝の盛衰を復元する。マヤ文明には「統一王国」はなく、複数の広域国家が形成された時期と、小都市国家が林立した時期とが繰り返された。大王朝が他の王朝に内政干渉することもあったが、旧大陸の諸文明とは異なり、遠く離れた王朝を征服して奪い尽くし直接統治することはなかった。強大な統一国家の場合、頂点が崩れると、文明全体が危機に瀕する。多様性を保つことが、マヤ文明の回復力を高めた。これは、画一化する現代社会がマヤ文明を学ぶ今日的な意義の

一つであろう。

第4章では、農民の暮らしを、エルサルバドルの世界遺産ホヤ・デ・セレン遺跡の発掘調査の成果などから描写する。この古典期の小村落遺跡は、600年頃の雨期（八月頃）の夜にロマ・カルデラ火山の大噴火によって、5mもの厚い火山灰に覆われ、短時間で放棄された。そのために大量の遺物が原位置に残され、農民の日常生活を生き生きと伝える。マヤの農民は、「四大文明」のような「大規模な灌漑農業」ではなく、小規模な灌漑、段々畑、家庭菜園などの集約農業と焼畑農業を組み合わせる多様な農業を展開していた。マヤは、「ミルクの香りのしない」人力エネルギーの文明であった。ミルクや乳製品を提供し、人や重い荷物を運び、農耕地を耕す「大型の家畜」はなかった。

第5章では、グアテマラのアグアテカ遺跡の調査成果から、宮廷人の日常生活をかいま見る。マヤ文明は、機械に頼らない「手作りの文明」であり、「モノづくりの文明」であった。旧大陸の「四大文明」では、支配層が工人や学者などの技術・知識集団を抱えていたとされる。対照的にマヤの支配層は、複数の社会的役割を担った。政治や戦争だけでなく、文字、暦、算術、天文観測、宗教儀礼、遠距離交換から手工芸まで農民が享受できない様々な知識や技術を専有することで、自分たちの権威、権力を強化した。戦争は、主に支配層の間で行われた。つまり近世日本の士農工商のように、支配層の武士、モノづくりにいそしむ被支配層の職人という身分体系ではなく、王・貴族＝戦士を兼ねる身分の高い美術家・工芸家という図式が存在した。

第6章では、マヤ文明を学ぶ今日的な意義について考える。日々の生活に追われる私たちは、100年以上にわたる文明の衰退の全プロセスを一代では観察できない。人間の一生では観察できない数千年という時間枠の中で、いつ、どこで、なぜ、どのように、文明が盛衰したのかを検証できるのが、考古学の強みといえる。マヤ文明を学ぶ今日的な意義の一つは、ささやかながら現代地球社会の諸問題の解決に光明を投げかけうることである。ポジティブな面では、マヤ人は多様な自然環境と共生し、2000年近く、都市によってはそれ以上にわたって持続可能な発展を成し遂げた。マヤ文明の長期間にわたる成功と失敗の要因を知ることは、大惨事を回避する鍵になるかもしれない。

東日本大震災で被災された会員に対する 2011 年度会費免除特例措置について

古代アメリカ学会 会長 加藤泰建

〔付記〕

このたび、本学会役員会での決定を経て、東日本大震災で被災されたことにより学会費納入が困難な会員を対象に、2011 年度（2011 年 10 月 1 日～2012 年 9 月 30 日）の学会費を免除する特例措置を実施することといたしました。会員のみなさまには、この措置につきまして、どうかご理解をたまわりますようお願い申し上げます。

申請を希望される会員は、所定様式の申請書（学会 HP からダウンロードできます）に必要な事項をご記入のうえ、メールまたは郵送で本学会事務局までご申請下さい。

1. 特例措置の適用については、申請書をもとに役員会で審議し決定いたします。
2. この特例措置は、2011 年度の会費について実施されるものです。
3. すでに 2011 年度の会費を納入した会員であっても申請できることとします。会費納入後に特例措置適用が決定した場合は、会費を返還いたします。
4. 申請の締切は 2012 年 8 月 31 日（必着）といたします。

〔申請書送付先・問合せ先〕

古代アメリカ学会事務局 jssaa@sa.rwx.jp
埼玉県さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学教養学部 井口欣也研究室気付
電話 048-858-3595（井口研究室）

事務局からのお知らせ

1. 第 17 回研究大会・総会の開催について

昨年の総会および『古代アメリカ学会会報』第 31 号でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第 17 回研究大会・総会を 2012 年 12 月 1 日（土）に国立民族学博物館（大阪府吹田市）において開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

なお、これもすでにご報告いたしましたように、今回の研究大会より、研究発表について審査制が導入されます。発表を申請される会員は、以下の「第 17 回研究大会における発表等の申請方法と審査について」をご参照の上、研究発表の申請をしていただきますようお願いいたします。

なお、すでに郵送いたしましたご案内の同封ハガキにて、研究大会、総会、懇親会のご出欠についてご返信（10 月 1 日消印有効）をお願いします。総会にご欠席の方は、同ハガキによる委任状へのご署名にご協力をお願いいたします。

記

古代アメリカ学会第 17 回研究大会・総会

日時 2012 年 12 月 1 日（土）

研究大会 09:30～16:30（予定）

総会 17:00～18:00（予定）

懇親会 18:30～

場所・会場 国立民族学博物館 第 4 セミナー室
（大阪府吹田市千里万博公園 10-1）

2. 第 17 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について

古代アメリカ学会第 17 回研究大会実行委員長
関雄二

第 17 回研究大会より、研究発表等の審査制が導入されます。会員より申請があった研究発表について研究大会実行委員会が審査をおこなったうえで、発表許諾の可否について通知いたします。

つきましては、研究発表を申請される会員は、以下の要領にしたがって申請をして下さい。

記

以下の事項を記入し、PDF ファイル（またはワー

ドファイル)にて事務局(jssaa@sa.rwx.jp)に添付ファイルでお送り下さい。

1. 発表申請者(会員に限ります)
2. 発表申請者住所・e-mail(発表申請者に対して審査結果を通知します)
3. 発表タイトル
4. 研究発表著者(共同発表の場合、研究大会抄録、プログラム等に記載する順番通りに記入してください)
5. 口頭発表者(実際に口頭発表をおこなう者。会員に限ります)
6. 発表要旨(調査速報:800字程度、研究発表:1200字程度、ポスターセッション:800字程度。要旨とは別に1-2枚の図版等を添付することも可とするが、その場合も要旨のテキストと同じファイルの中に組み込み、一つのファイルにして送付すること)
(*発表時間は、調査速報20分、研究発表30分を予定しています。ポスターセッションはA0で2枚以内によるものとします)

*締切:10月1日(月) 午前10時(メール必着)

審査結果については、10月15日(月)頃に申請者にメールで通知いたします。この通知と同時に、発表許諾者にたいしては、抄録要旨の原稿依頼・執筆要領などもお知らせしますので、決められた期日までにご提出をお願いします。

なお、審査基準は以下の「参考」をご参照下さい。とくに、単独発表か共同発表か、また著者の記載順をどうするかなどについては、あらかじめよくご調整のうえ申請をなさるようお願いいたします。

*参考

「古代アメリカ学会研究大会運営に関する申し合わせ(平成23年12月2日役員会決定)」より抜粋

・発表についての審査は、以下の原則に照らして判断することとする。

(内容)

- (1)研究大会でおこなわれる発表は、現在の一般的研究状況において一定の水準に達していなければならない。
- (2)発表の内容が、他の研究者の著作権やデータに関する権利を侵害してはならない。

(形式)

- (1)(口頭発表をおこなうことができる者)

口頭発表者(実際に口頭で発表をおこなう者)は会員でなければならない。ただし実行委員会が企画した招待講演・発表等についてはこの限りではない。

また、口頭発表者は、会員であれば第2発表者以下でも差し支えない。

- (2)(発表者および共同発表者の記載順)

発表者名(単独発表か共同発表か、共同発表の場合発表者記載順など)は、データに関する権利等の観点から適切でなければならない。このため、口頭発表者が会員であれば、非会員は第2発表者以下の共同発表者となることができる。

- (3)(複数の口頭発表についての制限)

1回の研究大会において会員が口頭発表をおこなう機会は一人1回とする。ただし、複数の共同発表者(記載順を問わない)となることができる。

以上

3. 原稿募集

① 会誌『古代アメリカ』

会誌『古代アメリカ』に掲載する原稿を募集しています。投稿希望者は、寄稿規定・執筆細目(2011年10月改訂、会誌第14号に掲載のものをご覧ください)をよくお読みください。論文原稿は随時募集し、査読を終えたものから順次掲載する予定です。

また、2012年12月刊行予定の第15号に掲載する「調査研究速報」(第14号より「調査速報」の名称を改めました)の原稿も募集します。発掘などフィールドワークの成果はもちろんのこと、文献調査やラボラトリーでの分析結果報告などについても、会員諸氏からの投稿をお待ちしております。なお、「調査研究速報」の原稿締切は9月25日です。

いずれの場合も、投稿希望者は下記編集委員宛てに事前にご連絡願います。投稿カードを配布しますので、これを提出原稿に添付してください。

お問い合わせ先:

井上幸孝(運営委員・会誌編集)

〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1

専修大学文学部(10号館研究室)

Tel. 044-900-0547 Fax 044-900-7848

E-mail takaio@po.aianet.ne.jp

② 会報「33号」

会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○古代アメリカ関連の学会・研究会等の情報

会員が所属する学会・研究会・勉強会・公開講座などの情報・発表報告。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。

○新刊紹介（古代アメリカ関連新刊書籍の紹介）

○その他（会員が必要と思われる情報）

◎形式

原稿字数は、写真・図版を含めて4000字（会報2ページ分）以内とします。

原稿は word ファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当まで事前にご相談ください。

◎投稿先

多々良 穰（運営委員、会報担当）宛

添付ファイルでメールにて送信してください。

E-mail yutatara@hotmail.com

<編集後記>

今回の目玉は、何と言っても初めて開かれた研究懇談会である。幹事となったお二人には、ご多忙のところ報告文を書いていただいた。記して感謝申し上げます。東日本ではGIS考古学について、西日本ではパブリック考古学というテーマで活発な懇談会となったようである。今後も、本学会の重要な活動として、ぜひ継続していただきたい。

会員からの投稿は、僭越ながら私が高等学校での博物館利用について書かせていただいた。また、自著紹介という形で青山会員から寄稿が届いた。ただ、毎回、同じ顔ぶれによる投稿が目立つ。研究活動の発信という意味で、多くの方々からの投稿を期待し

締切 12月28日（金）

4. 会費納入のお願い

2011年度までの会費が未納となっている方は、会誌送付時に同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、2009年度以前にさかのぼり、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

当学会の振込み口座は以下の通りです。

○ゆうちょ銀行

口座番号：00180-1-358812

加入者名：古代アメリカ学会

○三菱東京UFJ銀行本厚木支店

口座番号：1761650(普)

口座名義：古代アメリカ学会

5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2000円（会員価格。非会員の場合は3000円）で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

たい。

個人的なことで恐縮だが、前回の編集後記で、今年度は自分としても研究に携わりたいという気持ちを記させていただいた。周囲の協力もあり、現在、高校教員を続けながらの研究生生活を始めている。感謝の気持ちを忘れずに、研究成果を社会に還元していく必要性を強く意識しながら、今後も精進していきたい。

会報29号から今号まで、四度にわたって会報担当の運営委員をさせていただき、よい経験となった。この場をお借りして、ご協力いただいた会員の皆様に感謝申し上げます（多々良 穰）。

発行 古代アメリカ学会
発行日 2012年8月1日
編集 多々良 穰 (運営委員・会報担当)

古代アメリカ学会事務局
〒338-8570
埼玉県さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学教養学部 井口欣也研究室気付
E-mail : jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座 : 00180-1-358812
ホームページ URL <http://jssaa.rwx.jp/>